

夜須高原・県内青少年教育施設合同ボランティア養成事業

～青少年教育施設でボランティアをしよう～

- 趣 旨** 青少年教育施設の今日的な役割を理解し、子供たちの体験活動を支援するボランティア活動において、基本的な知識や技能を習得するとともに、施設ボランティアとしての資質や能力の向上を図る。また、研修を通して参加者の交流を図る。
- 主 催** 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立夜須高原青少年自然の家
- 共 催** 福岡県立社会教育総合センター、福岡県立英彦山青年の家
福岡県立少年自然の家「玄海の家」
- 協 力** 北九州 ESD 協議会
- 期 日** 令和元年6月15日（土）～16日（日） 1泊2日
- 会 場** 国立夜須高原青少年自然の家
〒838-0202 福岡県朝倉郡筑前町三箇山1103
- 対 象** 大学生、社会人
- 参加者** 参加人数：30名（学生15名、社会人15名）
県青少年教育施設職員：15名
- 日 程**

6月15日（土）
（午前）開会式
講義Ⅰ「青少年教育の理解」～青少年と体験活動の教育的意義～
福岡県立少年自然の家「玄海の家」 主任社会教育主事 本田 博之
（午後）講義Ⅱ「ボランティア活動の意義」
福岡県立英彦山青年の家 主任社会教育主事 中野 智之
実習Ⅰ「避難所運営ゲーム（HUG）」～緊急時に役立つ多様性配慮の視点～
一般社団法人 地域安全協会 代表理事 山本 一 氏
講義Ⅲ「KYT（危険予知トレーニング）」
福岡県立社会教育総合センター 主任社会教育主事 中根 正登

6月16日（日）
（午前）実習Ⅱ「野外活動の安全管理」
福岡県キャンプ協会 会長 木村 健児 氏
（午後）講義Ⅳ「青少年教育施設におけるボランティア活動の理解」
国立夜須高原青少年自然の家 企画指導専門職 上野 修司
実践発表「青少年教育施設の現状と運営」
福岡県立少年自然の家「玄海の家」 指導員 川宿田 和未
国立夜須高原青少年自然の家 総務係 立花 春香
法人ボランティア登録の案内・説明
国立夜須高原青少年自然の家 企画指導専門職 上野 修司
NEAL（自然体験活動指導者研修）説明
国立夜須高原青少年自然の家 事業推進係主任 西川 真一郎



2030年に向けて
世界が共通した
「持続可能な開発目標」です



10 活動の実際



【講義Ⅰ「青少年教育の理解」】



【講義Ⅱ「ボランティア活動の意義」】



【実習Ⅰ「避難所運営ゲーム (HUG)」】



【講義Ⅲ「危険予知トレーニング (KYT)」】



【実習Ⅱ「野外活動の安全管理」】





【講義Ⅳ「青少年教育施設におけるボランティア活動の理解」】



【集合写真】



【実践発表「青少年教育施設の現状と運営」】



11 感想

- 子ども達の安全やボランティアとしてだけでなく、これからの生活で危機管理についてとても役立つことが学べました。またケガの処置について、もっとくわしく知りたと思いました。
- 今回は「配慮」という私自身が感じたテーマでした。この研修を終え、研鑽したスキルを活かし、今後のボランティア活動に活用していきたいと思っています。
- （現在）ボランティア活動をしています。今回皆さんの話を伺って、すごい思いを持って活動されているのだなと思いました。私は何かお手伝いがしたいという単純な考えでしたので、少し落ち込みました。でも今後も（ボランティア時にいただいた）「ありがとう」の言葉を励みに頑張りたいと思います。
- 初めてこのような研修に参加しましたが、とてもいい経験になりました。「正解よりも最善を尽くす」には、その時のボランティアだけでなく、日頃の生活の中から意識する必要があると思うので、高い意識を持ちたいです。
- 楽しいだけでなく、自分自身のスキルアップになったと思っています。輪も広がり、今後また頑張っていこうという想いにもなりました。ありがとうございました。
- 私だけにとどまらず、今回得た知識や情報を伝えることができるよう頑張ろうと思います。
- 座学の活動が非常に多いと感じました。教育施設のボランティア活動は野外が多いと思います。なぜ野外に出た研修（火おこしなど）がなかったのか疑問に思いました。来年度は、野外での研修を多くした方がいいと思います。

12 成果

- 北九州 ESD 協議会との連携により、今回の企画が SDG s のうち「4. 質の高い教育をみんなに」「11. 住み続けられるまちづくりを」が該当する示唆をいただいた。開会行事ではそのことについて触れたため、研修全体の価値づけや意識化が図られた。
- 昨年度の課題（参加者を増やすための広報のあり方）から、本年度はチラシを刷新し、特に大学生の手元に届いて知ってもらえるように工夫した。大学の関係課からも直接学生に広報していただいた結果、5 大学（15 名）の参加が得られた。

- 今回初めての企画として「避難所運営ゲーム (HUG)」を実施した。福岡県防災管理局・消防防災指導課の協力を得て、講師を紹介していただいた。避難所運営そのものだけでなく、多様性配慮の視点が子どもの活動支援に活かせるスキルにもなるため、参加者には大好評であった(聞き取りによる)。また、講師の山本一氏の監修により、HUG カードも独自に作成することができた。
- 北九州 ESD 協議会の協力を得て、ESD の視点を踏まえた講師を紹介していただいた。(野外活動における火おこしと環境保全について、二酸化炭素排出量との関係から説明がなされた。ESD の視点は新たな知見にもつながった。なお、講師の木村健児氏は「ESD の種人(たねびと)」と称されている。)
- 日頃から福岡県教育庁教育振興部社会教育課、県立3 青少年教育施設と国立夜須高原青少年自然の家との関係が築かれていることもあり、3 施設から計5 名の職員を派遣していただいた。(そのうち福岡県社会教育主事の3 名が講師となって、それぞれの科目を担当することができた。)
- 県立3 青少年教育施設には、それぞれに施設ボランティアグループがある。その方々と今回初めて参加した方々との間で情報交換する交流の機会になった。(アンケートでは、他者の姿に刺激を受けてボランティアへの意識が更に高まったり、スキルアップを望んだりする感想が多数見られた。)
- 法人ボランティアの登録者が、新規・継続を合わせて11 名あった。(そのうち数名、後日予定されている教育事業への協力の申し出があった。)

13 課 題

- 今後も多くの大学生が参加していただけるよう努力が必要である。そのためには、事業直前になっての広報だけでなく、日頃から大学(や大学教員)との情報交換や意思疎通を密にしておく必要がある。また、今後は高校生の参加も含めて検討していきたい。
- 作成した HUG カードを、新たな夜須高原の活動プログラムとして学校団体等の研修支援にも活用してもらおうことができるよう開発する。
- 昨年度までは、KYT 研修を踏まえながら野外炊飯活動に取り組んだ。本年度は、KYT 研修は実施したが避難所運営ゲーム(グループワーク)を取り入れた結果、参加者の感想にもあったように「座学」中心のカリキュラムになった。本来、本カリキュラムはボランティアに必要な“知識・理解”の習得が中心であるため(“技能”的な習得は「救命救急」、野外活動時におけるスキルアップを参加者が切望されているのであれば、2泊3日での実施を行って研修内容を充実させるか、別日に改めてスキルアップ研修を組んでみるなどの対応が必要と思われる。また、ボランティア経験者と初心者との間で本研修の評価ニュアンスが微妙に違っていることから、毎年参加いただいている経験者と初参加者の双方が満足する講座にしていくことが課題である。(そのことも鑑み、今回は敢えて「避難所運営ゲーム」という新たな企画を取り入れてみた。)